

7 黒岩の天神

川津の黒岩天神さんは、なにぶんこのあたりに名のしれた社である。境内にもうでると、奉納されたおびただしい筆、鉛筆などが目にとまる。学問の神として天神さんが子どもたちに親しまれるようになったのは、寺子屋時代からで、庶民の子どもたちにも読み書きが始まるようになってからのことである。

道真公の霊がおそろしい雷鳴となつて藤原時平を悩ましたとか、また讃岐の国では城山に雨を祈つて、干ばつに苦しむ農民を救つた故事や、今に残る滝宮の雨ごい念仏踊りのように、讃岐の天神の社は夕立や雷を雨ごいの神として勧請したものが多いのだ。坂出では天保年間どうしたとか激しい雷鳴と豪雨が多くて塩田の被害はもちろん、雷にうたれて命をおとす人も出る始末だった。それで雷よけ、夕立よけに菅公さんを勧請したのが、いまある新開の天神さんだ。してみると、そこには雨をきらう塩田の町坂出の性格が出ているように思われてならない。

ところで黒岩の天神さんの場合は、その反対だ。むかし川津村には、広い所領を持っていた山口弥右衛門政安という郷土が住んでいた。

時は元禄五年（一六九二）の夏のことだ。ひどい干ばつが続いた。なんとか雨を降らせたい。弥右衛門は、百姓たちが天を仰いで嘆息する姿を見てたまりかね、たまたま自宅に菅公自筆の書状があるのを思いだし、弥右衛門はそれを取り出し、東川津の折居部落の山麓、そこにある黒岩の上に安置し川津八幡神社官（福家和泉）を招いて祈願をこめたのである。ところがそれから間もなく大雨が降ったから村人たちは大よろこび、さっそくその岩の横に祠を造営して祭ったのがそもそも黒岩天神の始まりで元禄五年の八月二十五日のことであつた。今から二百七十三年前の話である。村人たちはそれ以来日照りが続くと、この社に集まって雨ごいをするようになったので、誰いうとなく「雨天神」とまでいわれたのがこの黒岩の天神さんだ。それがいつの間にか一月、二月、三月、と入学期を控えるころになると、坂出はもちろんのこと、遠く丸亀、多度津方面からも雨ごいならぬ参拝客

がどつとふえてくるようになった。世相の推移がうかがえられるではないか。さて、このお社の山をすこし登ると、満千石という洞窟になった大岩がある。中には日照りにも枯れない清水がたたえられているが、不思議に海の潮が満つきには、この岩膚がぬれると言ひ伝えられている。天神のある黒岩は地質学的に言えば、火山噴出物が火山灰で凝固したいわゆる凝灰岩で、ぼろぼろにはげやすい性質をもっていて、ときにその中から八角形の結晶をもったざくろ石：金剛砂が発見されることがある。風化した境内の土の中から、たまたまそれが拾えるので土地の人はそれを珍重がって「八角石」だと呼んでいる。しかしそれも今は少なくなつて容易には見当らない。

『教育香川』 一九七〇年一二月号～一九七一年六月号に連載